
編集後記

私事ですが、令和4年度で35年間在職した明治国際医療大学を退職します。

理学療法士を養成する専門学校を卒業して40年、そのうちの大半を明治国際医療大学（旧明治鍼灸大学）とその附属病院総合リハビリテーションセンターで過ごしてきました。

リハビリテーションという世界は、医療について何も知らなかった私に一本の道筋を示してくれました。それは、日本の伝統医学（東洋医学）を学んでも全くぶれることはありませんでした。なぜなら、リハビリテーションは全ての人が社会で生き活きと生きていくことを支援するものであり、東洋医学は全ての人が自然と調和して生きることを支援するものであり、根本が類似しているからです。

1980年に世界保健機関が国際障害分類として障害の定義を行い、1981年に国際連合が「国際障害者年」を採択したことで、リハビリテーションに対する人々の関心は高まりました。しかし残念なことに、平安時代から江戸時代まで綿々と続いてきた当道座という日本独自のリハビリテーションシステムが明治政府によって壊滅されたことや、1960年に欧米で起こった自立生活運動（Independent Living Movement: IL運動）について、詳しく知る人は限られています。

当時は情報の入手が困難であった、という側面はあるでしょう。では、現在はどうでしょう。例えば、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）について、その背景、各国の動向、普及率など、情報を得ようと思えばいくらでも手に入る時代になっています。その情報を適切に活用できているでしょうか。

2019年から約3年間、私たちが経験した最大の災いは、情報が操作されたことだったかも知れません。そして、それは今後も続くでしょう。

今後は大学という組織だからできたことに終止符を打ち、小さな鍼灸院の一医家として、組織だからできなかったことを成すために、これからも常に疑問を持ち、知ろうとする努力を惜しまずに、日々の臨床を大切にしていきたいと思います。

令和4年12月吉日

日本東洋医学研究会会長 松本 和久

日本東洋医学研究会誌 第八巻 2022

編集・発行	日本東洋医学研究会誌 編集委員会
発行日	令和4年12月28日
発行者	日本東洋医学研究会
